

◀ S · E · L · D · A · A ▶ No.11

平成2年11月17日 発行

上智大学英語学科同窓会
東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学英語学科事務室 発行

Sophia English Language Department Alumni Association

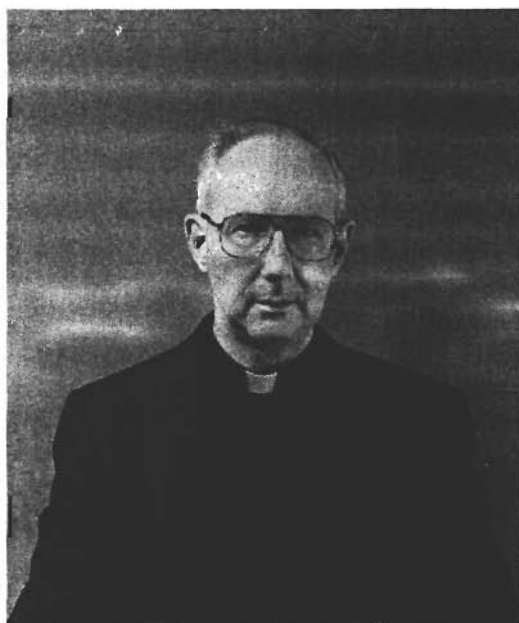
THE COMPANY

John J. Nissel, S.J.

"All Roads Lead to Rome." But sometimes they go to Spain first. As I mentioned in my letter in May, "THE COMPANY" is celebrating this year the 500th anniversary of the birth of St. Ignatius, our founder, and the 450th anniversary of the founding of the Company of Jesus, better known today as the Society of Jesus. So let me bring you up to date and add some information that I think you might find useful.

The celebrations officially opened on Sept. 27th at Loyola, in Basque country, in the north of Spain where Ignatius Loyola was born. His family estate is not too far from San Sabastian, and if you get a chance to visit northern Spain or southern France, it is worth trying to get to. The Superior General and 84 provincial superiors gathered there for a week of meetings to reflect on the past and to plan for the future. Incidentally Father Uralde, who worked many years in Japan, will greet you in Japanese. (It is pleasant to hear your own language when you are in a foreign country.)

But you are more likely to visit Rome, if you have not already done so. It was there in September 1540 that Pope Paul III gave his



approval for the establishment of a new religious order in the Church, the Jesuits.

So in Rome there are many "Jesuit" places to see. And we have our own Jesuit Guest Bureau to help you out. It is next to Jesuit headquarters (where Father Pittau is living now). Just a short walk from St. Peter's Square, at Borgo Santo Spirito 8. Here you will meet Ms. Elena Bartoli, the multilingual director. She can give information on where to stay, where to shop, and more important and useful, she can provide tickets for weekly papal audiences, and tickets to controlled areas like Vatican Gardens.

So if you intend to go to Rome and want her help, write to JESUIT GUEST BUREAU, BORGO S. SPIRITO 8, 00193 ROME, ITALY. Office Hours : Monday to Friday, 9 to 4. Phone 687-5800. As graduates of Sophia

you would be most welcome. But you had better tell her you know Father Pittau, not me. He is a little better known in Rome than I am!

Back to the Future 講座開設準備進んでいます

90年4月の常任委員会でBTF講座開設について松尾学科長より説明があった時、考えるより先に手が上ってしまい、準備係をお引受けしました。

卒業後16年仕事を続けてきて、「学生時代にもっとこんな勉強をしておけばよかった」と思うことが多く、私自身の潜在意識の中にBack to the Future 志願が大きくなっていったためといます。

大学は学問の場であるから、在学中に卒業後のことを考えるような講座は必要ない、社会のことは社会人になってから学べばよい、という意見もあるでしょう。しかし学生のほとんどが卒業後に職業を持つという現実があります。大学と実社会とは全く別の舞台ですが、役者は同じです。次の舞台での自分の役回りや筋書きを考えてみることで、今日の稽古にも身がはいるといえるものではないでしょうか。

さて、BTF講座は上智大学の中でも他の大学を見ても初めての試みと言えます。講座の運営管理は全て学科が行ない、「講師」に係わるいっさいの事項に同窓会が全面的に協力するというものです。人選から、講義内容、スケジュール管理まで。BTFという確立した学問があるわけではないし、前例もないので、自由に組み立てられるという反面、責任も重大です。松尾学科長はじめ常任委員の方々のアドバイスをいただき、ようやく前期3人の講師と講義内容のアウトラインが固まりましたので、ご報告します。

●長縄友明氏 39年卒 松下電器産業㈱法務二部部長

松下対Zenithの独禁法10年戦争に担当者として係わった経験、膨大な英文書類との戦い、

そしてブラッセルでの6年半の勤務を通じて扱った日本企業のヨーロッパにおけるケースの紹介をまじえて、日本企業のグローバル化と国際法務の重要性についてお話しいたします。法律分野の知識と高い英語の運用能力を要求される国際法務の仕事は、現在企業の中で不可欠の業務であるにもかかわらず、人材が不足している。この分野をみざすとしたら、今学生は何をどう学んでおく必要があるか。

●安田尚代氏 55年卒 ディクソン・グリーン・ベンソン外国法事弁護事務所 弁護士

英語科卒業後シカゴ大学に留学。国際関係論でMAを取得したが、考えるところあって、ロースクールに入り、弁護士への道を選ぶ。県立高校出身の普通の女性が、自立を考えて、在学中、留学、米国での職場経験を通じて、その時点々々で進む道を選び決断してきた。その背景にあるものは何か。また、ロースクールでの勉強の様子、学生達の考え方を紹介していただくと共に、弁護士として外側から日本企業の国際法務の現場に係ってきた経験をお話しいたします。

●安田鈔暁氏 41年卒 日産自動車㈱海外部長

輸出の時代から工場進出、経営の現地化まで、イギリス、アメリカ等現地での体験も含めて日産の海外活動に一貫して携ってきた。日本企業が海外で人を雇い、物をつくり、売る時代に、本社と現地会社、現地の従業員と日本人社員とのコミュニケーションの問題が起っている。異文化コミュニケーションを理論でなく、実践していくべき企業のあり方と個人のあり方を、失敗談やマスコミで取り上げられた事例も交えて

お話いただきます。

どこでも聞ける客観的業界分析的な話に止まらず、一卒業生の職場での業務経験を縦軸とすれば、個人としての本音、人生観を横軸とした講義になることを目指しています。学生にとっては将来を考える材料に、卒業生にとっては、現在を見直すチャンスになると思います。「英語

運用能力を身につけ、世界的に通用する教養を学んだ人材を世に送り出すこと」を指命とし、「卒業生と仲の良い学科」を目指す英語学科に、このBTF講座が少しでも貢献できれば幸いです。講師として、アドバイザーとして、卒業生の皆様のご協力をお願い致します。

担当：斎藤敬子（432-4376）

卒業生便り

「英伊語・英伊文学接触史」 研究者のひとりごと

川村学園女子大学文学部助教授
武田正實（38年卒）

外英を出て、東大大学院でも英語学を専攻したくせに、なぜイタリア語なんかやっているのだ、と他人からよく言われる。その言葉には、いかにも「余計なものに気を散らして、専攻意識薄弱で下らない野郎だ」という裏の意味がこめられている。

どういたしまして、私がやっているのは、ただの英語だ。その英語に、イタリア語の面があるだけの話だ。例えば、日本語をやっているものが中国語もやっているからといって、薄っぺらで下らない野郎だということになるだろうか？日本語に落とす漢語の蔭は余りにも大きい。そしてその漢語の精神を理解するには、現代中国語をもガッチリものにすることが必要である。ものにしてしている者と、いない者とは、日本語の魂の把握の仕方がまるで違う。

英語とイタリア語の関係も、まさにそれである。「すべての道はローマに続く」のだから、その道をたどって古巣のローマに戻ってどこが悪い、といいたい。手許のたとえばPODの任意の頁を開いてみれば、そこに平均2つや3つの狭義のイタリア起源の単語は載っている。イタリアはラテン語の本国であることを考えれば、広義には、その頁の60%強の語彙がイタリア起源だとすら言える。こんな言語に手を出すことが、なぜ薄っぺらなのだ、と反論したくなる。「マッ



テオ・バンデッロのないシェイクスピアがあり得ますか？ ジラルディ・チンティオがいないシェイクスピアが考えられますか？ セール・ジョヴァンニ・フィオリエンティーノをやらずにシェイクスピア研究家などとおめおめ人前で言う方が、よほど薄っぺらじゃありませんか？」と言ってやりたいのをグッとこらえているのも、また仕事のうち。

〈著書〉

「現代伊和・和伊熟語大辞典」日外アソシエーツ
「生きているイタリア語表現」音羽出版 他多数

〈訳書〉

モンテッソーリ「創造する子供」エンデルレ書店
ヘインストック「家庭におけるモンテッソーリ教育
の実践・未就学児編」エンデルレ書店
ベネット「生きがいある長寿国」日本交通公社出版
事業局〔共訳〕 他多数

（なお武田氏は国立イタリア大学フロルディ研究室
終身名誉研究員としても活躍中）

海外で気付いた日本文化の 内面的重要性

日本航空ローマ支店旅客マネジャー
昭和38年卒 長谷川和彦

若さとは人それぞれの物理的年齢ではなく、
気持すなわち精神の問題で、と書き出しながら、
ふと一般教養で取った化学の柴田教授の哲学的
講義の一コマを思い浮かべている自分に気付き、
既に四半世紀以上が過ぎた学生時代を懐しく思
いだした次第です。というのは、マスコミに助
長された誇張表現、化石人間等という表現が流
行したなかで、年功序列の日本社会では、世代
の断絶が幾何級数的に進んだせいも、若いつも
りの私たちの年代が一つ距離を置かれて10年、
20年の年齢差の層とさえなかなか一体感を感じ
られない機会が日本人社会で多いなかで、老い
たかと一瞬感じる事が正直言って増えたこの頃、
イタリア人社会では一向にこの感じを持たずに
過ごせる現実海外生活が長くなればなる程文化
の差の深さを感じざるを得ません。老の問題
にも CULTURE GAP があり、個人の尊厳を求
めた西洋の社会において個々の人間が対等の関
係にあるなかで、個人を組織との関係でとらえ
た日本社会での組織を離れた個人の存在の希薄

激動のニュースの世界を 追いかけて

日本テレビ報道局ニュースセンター外報部デスク
昭和44年卒 森重恭介



さと、儒教の影響からくる年長者に対する敬意
との混ぜ物が個人を対等の土俵に上げる妨げと
なり、皮肉な事にこの文化現象が今日の日本の
産業に世界で類をみない成功をもたらした主な
源泉である事に留意する時、明治以来西洋に
追いつき追い越せの物質面での比較を卒業して、
比較文化的手法をもって特異ともいえる日本文
化の内面への洞察を深める事が今私たちに一番
大切な事かと思われます。近年のマスコミの論
調のなかに見られる「西洋に追いついた日本が
目標を失って云々」は西洋文明を受身的に見続
けてきたために思い浮かぶ危惧に過ぎず、日本
文化が今の世界にどのような貢献ができるかと
いう能動的発想に転じる時霧散する危惧に過ぎ
ません。諸姉兄のご活躍をお祈りします。

テレビ局には内外のニュースを扱う報道局が
ありまして、その中に、外報、外信、国際と呼
び名は各社によって様々ですが、海外のニュー
スを出稿するセクションがあります。NHKは
別格にしまして、民放各社とも、東京本社に、
部長以下10数名から20名前後の記者を配置し、
海外支局員10数名と連携して早朝から深夜まで
のニュース枠を日々埋めているわけです。

私は、これまで二度（ベイルート・カイロ支
局、74年11月～80年12月。ワシントン支局、84
年8月～89年3月）海外支局勤務の経験があり
ますが、『日本テレビさんは、ニュースもやって
いるの』と言われたベイルート時代はともかくも、
レーガンを追いかけたワシントン時代が、
色あせたモノクロ写真に思える程、去年前半か

らの“世界”は、激動・激変を重ねています。

中国の恐さと限界を見つけた天安門事件に始まって、去年夏頃からの東欧諸国民の西への大量流出。11月には、あのベルリンの壁までも突き破ってしまいました。この時は、たまたま泊り勤務でして明け方の4時台、“壁が開いた”という外電を、武者ぶるいに似た感覚で原稿にしていったのを良く覚えています。

東欧の激変は、ゴルバチョフ、ソビエトが、東の盟主としての役割に魅力を感じなくなったのが最大の要因ではあったのですが、とにかくこの民主化のスピードには、驚くばかりでした。米ソの相対的な国際管理能力の低下は、今年

に入っても、イラクのクウェート武力併合、朝鮮半島の雪どけといった形で、大きなニュースを呼びこんでいます。カメラがどこまででも追いかけていき、しかも瞬時に映像が送られてくる世の中ですから、テレビ局の海外ニュースの比重は今後もますます高まることは必至です。

今の私に課せられたことは、ニュースの取捨選択、若手の育成、適材適所の取材チーム派遣などと、色々あるのですが、毎日々々、ニュースの洪水の中に座していますと、やはり自ら現場に飛んで、取材リポートを今一度やってみたい、と、こんな小さな夢を捨てきれずに、毎日を過ごしております。

社長一年生。初仕事はシスターブリッジの締結

西日本放送 代表取締役社長
昭和55年卒 平井卓也

はからずも4年前、祖父が創立した会社、西日本放送の社長業をひきつぐことになった。平社員から社長業へ、文字通り、なかとびで、スゴロクの「上り」に入っただけに、民放業界最年少の社長となってしまった。

民間放送という企業は、社歴が新しいわりに、日本経済の成長にささえられ、比較的苦勞知らずの業界だけに、若年寄りのような企業体質を感じる。

いい意味でも、悪い意味でもおっとりしているわけで、若い自分には、そういう日本のオミコシ経営にあきたらず、桶狭間の信長よろしく、先頭切って走ってしまう毎日が続いている。

勿論、本人としては結構楽しんでるわけで、卒業生便りということでその一端をご報告し、元気にやっていることを知っていただきたい。

社長一年生で、ついつい言い出しっぺになった初仕事は、当エリアに架けられた鉄道併用橋としては世界一の瀬戸大橋とサンフランシスコのゴールデンゲートとの姉妹締結であった。

地方博覧会の中に国際色を、ということでの提言であったが、アイデアを企画に、さらにイベントとして実行するという実践の苦勞を文字



通り身を以って体感した初仕事であった。

特に、アイデアの言い出しっぺであり、故郷に帰っての初仕事だけに、その成果は地元のオピニオンとしての鼎の軽重を問われることになりかねない。

サンフランシスコに香川、岡山両県の百余名の使節団を送り、かつ、瀬戸大橋博覧会開催時に、アメリカからの50余名の使節団を迎え、それぞれのセレモニーを無事終った時の感激は忘れられないものがある。

また、当初交渉相手もわからない状態で模索するなかで、地元の若手経営者の方々から多くの声援、支援を得たことは、自分にとって大きな財産となっている。

いろいろ新しいことを手掛けるたびに、ヒトのもつネットワークの大切さ、友情のありがたさを日々実感するだけに、「人」という文字が示す意味をかみしめる昨今でもあります。

〈現役学生より—こんなこと頑張ってます!〉

ソ連人学生との交流

3年 宮寺淳子



今年の8月に、モスクワ大学の学生3人が日本に10日間滞在しました。1月にモスクワで開催された国際会議の際に松尾先生が彼らからぜひ日ソ学生交流をしたいという要望を受けられ、その件を英語学科に紹介されたことでプログラムは始まりました。

日光や京都に見られる日本の伝統文化に触れ、また主に東京では新聞社の見学や学生との話合いの場を持ちました。10日間は予想以上に短く、お互いにカルチャーショックを感じることもありましたが、彼らと接していて、あのペレストロイカを自分のレベルで考えられたことは、予想以上の収穫でした。ペレストロイカに対する真剣さに、私は印象づけられました。それぞれにとってのソ連と日本。これを出発点として、私たちは来年のプログラムの成功に向けて活動しています。

10号館英語学科室より

英語学科秘書 金光美代

英語学科事務室に来て10ヶ月が過ぎました。赤児の生長と比較するならばそろそろ一人歩きを始める頃でしょうが、現在の私はまだまだおんぶにだっこといった現状です。猫の手も借りない程忙しい日々。読書三昧の日々。しかし毎

STPに参加して

3年 嶋村仁志



この夏、私は学内英語学科会主催のサマー・ティーチング・プログラム（略称 STP）に参加した（実はこれが3回目）。この企画は、夏休みの1週間、中学生に英語を数える、というものののだが、彼らとの授業や色々な会話、一緒になって遊んだ体験は一生の思い出になるだろう。一昨年教えた子（今はもう高校生）は未だに手紙に、「中学の時の STP の体験は修学旅行の思い出に勝っている」と書いてくれる。

今年の9月、そんな中学生達に会いたくなって、彼らの中学校の運動会を見に出かけた。しかし、その内のある中学で見たのは、閉会式で壇上の先生にかれこれ15分程叱られている彼らの姿であった。彼らは合図で整然と集合しなかったために叱られているらしい。中学時代の大切な思い出となる運動会がこのように終わってしまうのもまた、一つの教育なのだろう。

子どもを管理の対象ではなく、権利行使の主体として捉える「子どもの権利条約」が10月から国際法として、その効力を発している。しかし、日本ではまだその比准どころか、世論の対象にさえなっていない。



日がそれなりにとても充実した日々を送らせていただいております。英語学科に来て良かったと思う点が多々あります。第1にオープンであるという事。各先生方のドアが学生達が入り易いようにと開け放たれているように……たとえドアが閉っていてもノックし開かれたドアの向う側には暖かい笑顔が迎え入れてくれるように……。第2に各々の先生方には各々の素晴らしい味があり、接する度に色んなことを学ばせていただいています。とても住み心地、生き心地の良い場所だと思います。この他にもまだ良いなと思う点はありますが、このような気持ちを卒業生の皆様方とも分かち合いたいと思います。在学中はきっと先生と学生、教える側と教えられる

る側という目に見えない壁、あるいは無意識の内に意識してしまう壁というものがあり、気楽に話し合う場が持てなかった事もあったかと思えます。しかし卒業された今はそれらの壁が取り払われ、共に今を生きる者として近況報告、仕事上の悩み、喜び等を話しに来てみませんか？先生方は皆さんが学校に来られるのをいつも心を開いて待っていて下さっていると確信致します。共に今という時代をより良く生きようとする者同志の語らいが持てる場の橋渡しをしたいと思っております。上智を巣立たれて年月の浅い人もそして遠き昔となられた方も、いつでも気楽に立ち寄れる場所となって欲しいと思っております。

上智大学英語学科平成2年度予算

収 入		支 出	
科 目	予 算	科 目	予 算
1. 前期よりの繰越	2,055,076	1. 名簿作成積立金	500,000
2. 入 会 金	194,000	2. 名簿作成準備金	50,000
3. 会 費	1,841,000	3. 会 報 作 成	400,000
4. 受 取 利 息	20,000	4. 会 報 郵 送 料	770,000
5. 雑 収 入	0	5. パーティ補助金	100,000
		6. 女性セミナー	60,000
		7. 常任委員会運営費	10,000
		8. 事務局運営費	300,000
		9. 幹事会運営費	30,000
		10. SELF 援助金	100,000
		11. 講 演 会	50,000
		12. 予 備 費	1,740,076
合 計	4,110,076	合 計	4,110,076

会費お支払いのお願い

会報10号で紹介しましたとおり、SELDAの諸活動は、卒業生の皆様からの会費で運営されています。事務局一同は、より一層の活動内容の充実と拡大を図ってゆく所存です。新たに郵便振替口座を設けましたので、まだ会費の未納の方は、同封の振替用紙で最寄りの郵便局より是非お支払いいただくようお願い致します。

尚、今迄に一度も会費をお支払いいただいていない方は、入会金も併せてお支払い願います。

入会金：1,000円

年会費：2,000円（出来れば3年分お願いします。）

事務局長

女性セミナー定期開催のご案内

前号の会報 NO. 10でご紹介しておりますように、SELDAA では、41年卒の鈴木禮子さんのお世話により「女性セミナー」を月一不定期開催しています。これは、英語学科出身の女性を対象に、卒業後も英語に関わる、又それにこだわらない週辺の知識を吸収してもらう教養セミナーとして位置付けています。講師の方も上智大学の教授のみならず外部からもお願いしています。現在では、会員数も50名を越え、常時30名程度の参加者で開催されています。会員も英語学科出身に限らず、他学科の卒業生、その友人関係の方も増えています。皆さんも、奮って参加してみたいかがでしょうか。

「女性セミナー」の詳細は、

日 時：（原則として）毎月第4水曜日

午前10：30～12：00

場 所：かつらぎ館地下ホール（上智大学内）

年会費：3,000円

連絡先：世話人（昭和41年卒）鈴木禮子（321-3378）

会 計（昭和43年卒）吉田知子（332-1840）



*参加を希望される方は、上記連絡先へご一報ください。

SELDAA 臨時総会及び 懇親パーティ開催時期変更のご案内

第三期 SELDAA が発足してはや半年が経過しました。常任委員一同、前号の会報 NO. 10でご案内したような種々の企画を推進・準備中です。

その活動の一環であります懇親パーティを例年ですと、11月下旬に行っていましたが、次のような理由で、来年1991年4月に実施することに10月実施の常任委員会で決定しましたのでお知らせします。

常任委員会では、組織が大きくなり、人数が多くなったことから現在、会則の一部改訂、野口基金運用の詳細決定などの作業を進めていますが、時間を要することから来年4月までに内容を詰め、そのとき開催を予定している臨時総会にて会員の皆様の承認を得たい意向です。このため、臨時総会及び懇親パーティの実施を来年4月に変更させていただく次第です。

なお、日時・場所など詳しくは、次号会報 NO. 12にてご案内致します。

英語学科卒業生の皆様へ

各地での個人・グループの近況、活動、住所変更など、皆様からのお便りをお待ちしております。

SELDAA 編集委員一同